

M7CL

クイックスタートガイド

A guide for people using M7CL Version 3 in the real world.

Part 2

M7CL Version 3および新モデルM7CL-48ESを加えたM7CLシリーズのための入門ガイド

このクイックスタートガイドは、初めてM7CLをお使いになる方、またM7CLおよびPCソフトウェアM7CL Editorをよりよく知るための手がかりを必要とされる方々のためのガイドです。



M7CL / M7CL-48ES クイックスタートガイド

M7CLクイックスタートガイドは3つのパートで構成されています。ヤマハプロオーディオサイト (<http://proaudio.yamaha.co.jp>) のセルフトレーニングページよりダウンロード可能です。

Part 1ではM7CLシリーズの紹介およびコンソールの基本操作について説明します。

Part 2では内蔵エフェクトラック、シーンメモリーのストアやリコールといったデジタルミキサー特有の機能について紹介します。

Part 3ではシーンメモリーのより詳細な使い方、およびPCソフトウェア「Studio Manager / M7CL Editor」を使用したリモートコントロールやオフライン設定について説明します。

M7CL-48ESをお使いの方は、EtherSoundシステム設計の基本について解説したヤマハプロオーディオサイトの「EtherSoundセットアップガイド」もご覧ください。



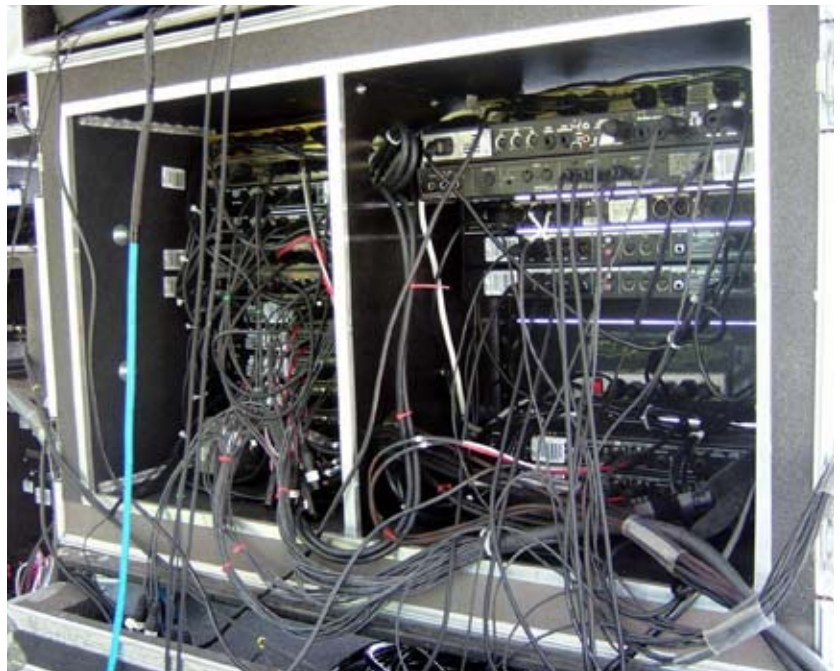
目次

バーチャルラック3
エフェクト、グラフィックEQおよびVCMエフェクト3
バーチャルラックにエフェクト/GEQをマウントする(組み込む)4
エフェクトの選択、エディット、保存5
エフェクトの種類 - VCMエフェクト6
エフェクト / GEQのパッチ7
GEQの選択と操作8
GEQ設定のコピー、ペースト、比較および保存9
モニターセクション10
CUEボタン / モニターアウトプットの割り当て10
モニターフェーダー機能11
アウトプットポートディレイ11
ユーザー定義キー - ユーザー定義キーへの機能割り当て12
DCA / ミュートグループ13
チャンネルをDCAマスター / ミュートグループに割り当てる13
シーンメモリーを利用する - シーンのストアとリコール14
シーンメモリーを利用する - シーンに含まれる設定15
トラブルシューティング16

バーチャルラック - エフェクト、グラフィックEQおよびVCMエフェクト

M7CLにはマルチエフェクター、グラフィックEQ、および高性能のダイナミクスプロセッサといった従来の外付け単体エフェクターのラックに替わり、内蔵の「バーチャルラック」を搭載しています。バーチャルラックは2チャンネル（ステレオ）の8つのラックで構成されています。31バンドグラフィックEQを8つのラックすべてにマウントする（組み込む）ことができ、下段の4つのラックにはSPXタイプのマルチエフェクトまたはVCMエフェクトをマウントすることができます。また、グラフィックEQ使用時は1つのラックで、31バンドGEQ x1台が「Flex15」GEQ x2台を選択することができます。

ファンクションアクセスエリアの[RACK]ボタンを押してバーチャルエフェクトラック画面を表示させます。この画面には[GEQ / EFFECT]と[EXTERNAL HA]の2つのタブがあり、これらのタブを押して画面を切り替えます。



従来のアナログラックから「バーチャルラック」に



M7CL-48/32のEXTERNAL HA画面



M7CL-48ESのEXT-ES HA画面

バーチャルラックGEQ / EFFECT画面は、GEQおよびエフェクトの選択と操作に使用します。

バーチャルラックEXTERNAL HA画面は、外部ヘッドアンプ（AD8HRタイプまたはSB168-ES）のコントロールに使用します。

バーチャルラック - バーチャルラックにエフェクト/GEQをマウントする(組み込む)

デフォルトシーン000では、バーチャルラックには4つのGEQと4つのエフェクトが割り当てられています。バーチャルラックには常に8つのラックが使用できるようになっています。そのうち、エフェクトとして選択できるのはラック5-8です。31BandGEQまたはFlex15GEQは1-8のどのラックにもマウントできます。各ラックを現在選択されている状態から変更するには、[RACK MOUNT]ボタンを押して選択したラックのRACK MOUNTERポップアップウィンドウを表示させます。



[RACK MOUNT]ボタンを押してRACK MOUNTERポップアップウィンドウを開き、マウントしたいユニットの種類を選択します。

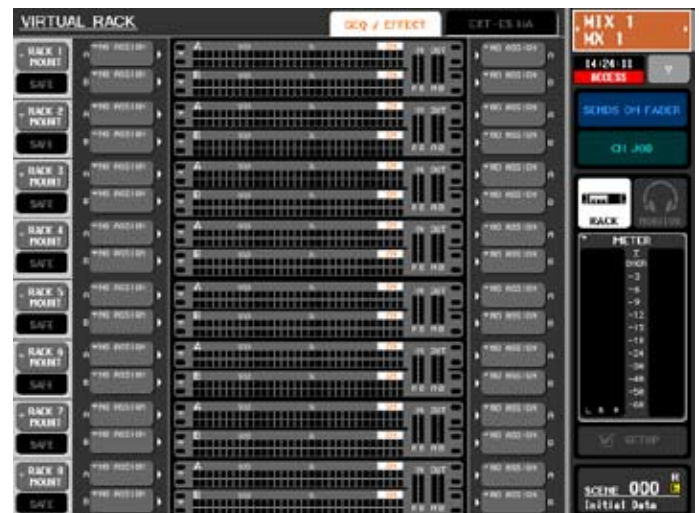


[OK]ボタンを押して選択を確定し、ポップアップウィンドウを閉じます。

新たにマウントされたラックユニットはまだパッチされていない状態です。エフェクトやGEQのパッチ設定方法については、7ページを参照してください。

Tip; 8つのラックすべてにFlex15GEQをマウントした場合、ラック全体で16個のGEQを持つことになります。これらはウェッジモニター用のミックスに便利です。

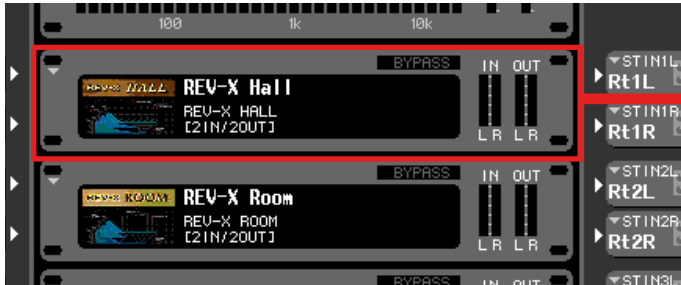
Tip; GEQのパラメーターはシーンメモリーに含まれます。シーンチェンジによりGEQ設定を変えたくない場合は、RACK MOUNTボタン下の[SAFE]ボタンを押してください。



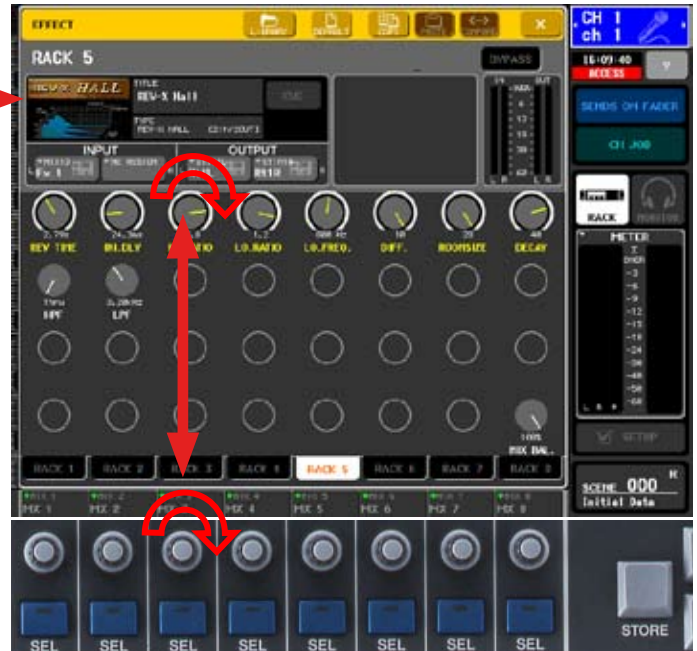
バーチャルラック - エフェクトの選択、エディット、保存

シーン000ではよく使われる標準的なエフェクトがあらかじめ選択されています。デフォルトのREV-Xリバーブは最も自然な響きを再現し、SPX2000マルチエフェクトユニットのために開発されたものですが、ヤマハの従来のリバーブエフェクトサウンドがお好みの方はヤマハSPXマルチエフェクトユニットのリバーブも選択してご使用いただけます。

バーチャルラック画面でラックにマウントされたエフェクトイメージ中央部を押すと、EFFECTポップアップウィンドウが表示されます。



エフェクトのパラメーターはスクリーン下のマルチファンクションエンコーダーを使用して調整することができます。パラメーターの列が複数ある場合は、エンコーダーを使用する前に画面上で操作したい列のノブを押して選択します。



別の種類のエフェクトを選択するには、カラー表示されたエフェクトイメージ部を押してEFFECT TYPEポップアップウィンドウを開くか、EFFECTポップアップウィンドウ上部にあるLIBRARYボタンを押してEFFECT LIBRARYからエフェクトを選択します。



[LIBRARY]ボタンまたはカラー表示されたアイコンを押します。



このポップアップウィンドウでは新しいエフェクトのリコールや、エディットしたエフェクトの保存を行います。



このEFFECT TYPEポップアップウィンドウでは新しいエフェクトのリコールを行います。

バーチャルラック - エフェクトの種類 - VCMエフェクト

さまざまなSPXマルチエフェクトに替わる選択肢として、6種類のVCM (Virtual Circuitry Modeling) エフェクトがあります。これらのVCMエフェクトによって、以前は希少で繊細なアナログ機器を使用するか、PM5D-V2のような上位機種のみキサーでしか得られなかったサウンドをM7CL V3で利用できるようになりました。

M7CLはすべてのチャンネルにEQおよびコンプレッサーを搭載していますが、VCMエフェクトをバーチャルラックにマウント (ラック5-8にマウント可能) してチャンネルにインサートすることによって、さらに表現の選択肢が広がります。

Note; デフォルト設定では、エフェクトユニットはセンド/リターンのパッチ設定になっていますので、VCMエフェクト使用時はインサートとしてパッチ設定を変更することをおすすめします。

Tip; マスターアウトにOpen Deckをインサートしてみてください。ミックスにアナログの質感が加わります。



COMP 276

このモデルはレコーディングスタジオで定番として求められるアナログコンプレッサーの応答性、周波数特性および真空管アンプの飽和感までも再現し、アナログ銘機がもつ太く芯のあるクラシックスタイルのコンプレッションサウンドを提供します。



COMP 260

1970年代半ばのコンプレッサー/リミッターのVCA回路とRMS検出を忠実にモデリングし、ライブSRで定番として求められるクラシックスタイルのコンプ/リミッターのサウンドを再現します。



EQ601は、クリーンとドライブの2つのイコライザータイプを提供します。ドライブタイプは1970年代アナログEQ回路の歪み特性をモデリングし、ドライブ感、飽和感のあるサウンドを実現します。EQ601はステレオ6バンドパラメトリックイコライザーで、ブースト、カット両方の周波数特性とヴィンテージアナログEQのバンド干渉までも忠実に再現します。



OPENDECKは業務用オープンリールレコーダーの往年の銘機とアナログテープの磁気特性を再現します。アナログのテープデッキでの録音/再生はピークレベルを抑え、帯域感を整える作用があるために、現在でもハイエンドの録音スタジオでは70年代から80年代にかけての銘機といわれるオープンデッキをマスタリング段階でコンプレッサー的に使用しています。サウンドの好みに応じてオープンリールのテープタイプがNEW/OLDから選択できます。

OPENDECKはSwiss '70、Swiss '78、Swiss '85、およびAmerica '70の4つのモデルが選択できます。異なるタイプの録音/再生デッキを個別に組み合わせることで、音質を様々に変化させることができます。



VCMテクノロジーは、従来のDSPプロセッシングパワーを革新的な方法によって利用することで往年のアナログ銘機の回路特性をエミュレートする技術です。K's LABによって開発され、当初はアナログシンセサイザーのサウンドを再現するために利用されていましたが、やがてその技術はコンプレッサーやEQといったアナログエフェクト機器のエミュレーションへと適用されることになりました。かつてはヤマハのハイエンドモデルにおいてのみ、または別途購入することによって利用可能でしたが、M7CL V3ではVCMエフェクトが標準搭載されました。



VCMテクノロジーを開発したK's LABプロデューサー、国本利文技師

Note; COMPの「S」がつくバージョンはステレオモデル、「S」のないものはモノスプリットモデルです。



さらなるエフェクトの選択肢を必要とするエンジニアの方には、Waves社が製造・販売するMini-YGDAIカードと接続した外部PC/Macサーバー上で動作するWaves SoundGridエフェクトが使用できます。このシステムは極小のレイテンシーとリダンダンシーを実現し、ライブミキシングでの使用に最適なパフォーマンスを提供します。



バーチャルラック - エフェクト / GEQのパッチ



シーン000では、初期設定としてエフェクトはあらかじめパッチされています。エフェクトセンドはMIX13-16に、エフェクトリターンはST IN1-4にパッチされていますが、これ以外にも自由にパッチを変更することができます。

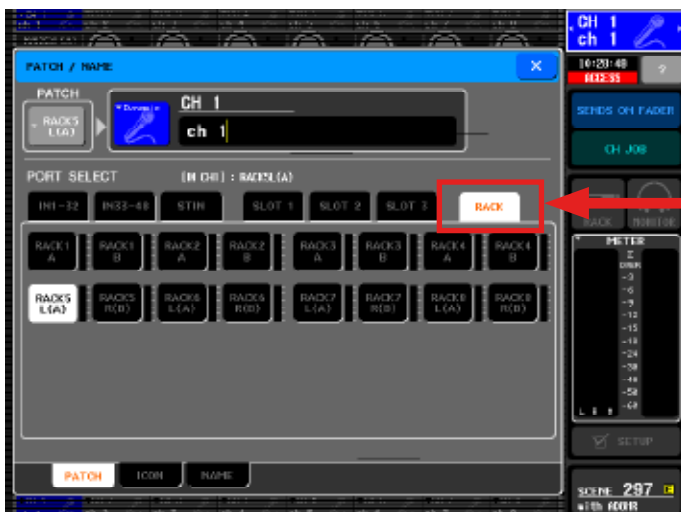


GEQは入力、MIX、MATRIX、およびステレオマスターチャンネルにインサートとしてのみ使用します。エフェクトはアウトプット系チャンネルをセンドバスとしてセンド / リターンで使用したり、各チャンネルにインサートして使用することもできます。



エフェクトをセンド / リターン経由で利用する場合は、エフェクトリターンチャンネルへのパッチをする必要があります。シーン000の初期設定ではST INチャンネルが選択されていますが、これ以外にもパッチを変更することができます。INPUT CH SELECTポップアップウィンドウを開くには、ラックのエフェクトイメージのとなりにあるグレーのアサインボタンを押すか、OVERVIEW画面からPATCH / NAMEポップアップウィンドウを開きます。PATCH / NAMEポップアップウィンドウではエフェクトリターンのパッチ、チャンネル名やアイコンの設定を行うことができます。

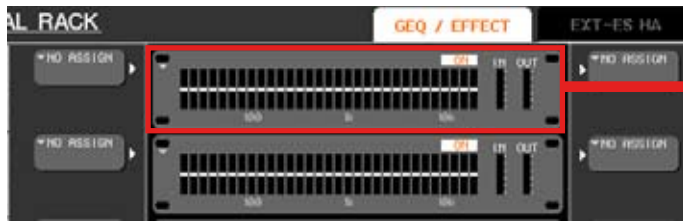
Tip; エフェクトリターンに別のチャンネルを選択した場合でも、初期設定のパッチはされたままです。この場合、ST INチャンネルへのエフェクトリターンのパッチを外すか必要なインプットパッチをあらためて設定してください。



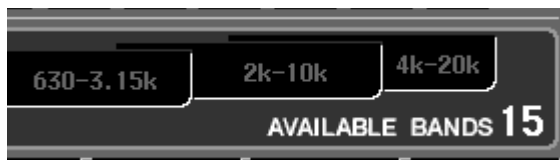
Note; 上記画面はエフェクトのチャンネルへのパッチを示したのですが、別の方法もあります。OVERVIEW画面でチャンネルを選択し、使用するラックをパッチします。この方法は必要のないエフェクトリターンパッチを外す場合に便利です。

バーチャルラック - GEQの選択と操作

バーチャルラック画面でラックにマウントされたGEQのイメージを押すと、GEQポップアップウィンドウが開きます。

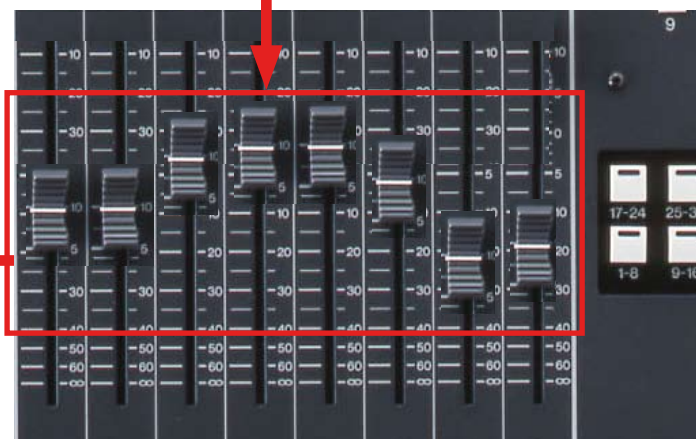


GEQポップアップウィンドウのGEQイメージ上で操作したい周波数帯域を押して選択します。たとえば200-1kの帯域部分を押すと、その帯域のフェーダーのイメージとタブが白く表示され、Centralogicセクションのフェーダーが選択された帯域に対応します。これらのフェーダーを使ってGEQカーブが操作できます。GEQイメージ上の異なる周波数帯域エリアまたはFADER ASSIGNタブで異なる帯域を選択すると、操作する帯域を変更できます。ポップアップウィンドウ上部の[FLAT]ボタンを押すとEQ全体をフラットに戻すことができます。



Note; Flex15GEQを使用した場合も同様に周波数帯域を選択、操作できます。画面下に操作可能な残りのバンド数が表示されます。

Tip; Centralogicセクションの[ON]キーを押すと、該当する帯域のみをフラットに戻すことができます。EQ全体をフラットに戻すには、ポップアップウィンドウ上の[FLAT]ボタンを押します。

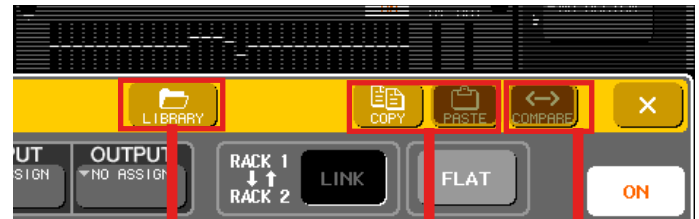


バーチャルラック - GEQ設定のコピー、ペースト、比較および保存

GEQポップアップウィンドウ上部には、COPY、PASTE、COMPAREおよびLIBRARYボタンが用意されています。



Tip; GEQポップアップウィンドウ下部の[RACK]タブを使って異なるGEQユニットを選択して切り替えることができます。



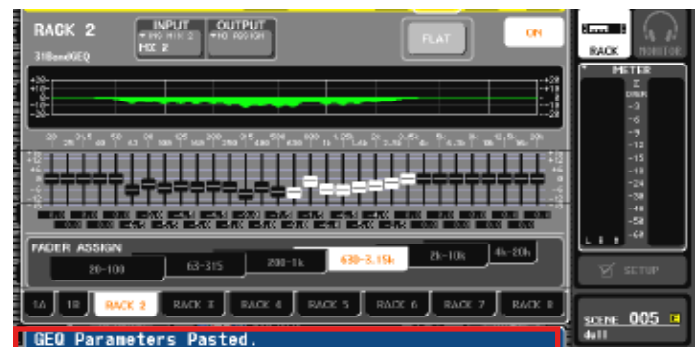
[COPY]ボタンを押すと、現在選択されているGEQ設定をバッファーマemory（一時保管用のメモリ）に保存します。別のGEQを画面に呼び出し、[PASTE]ボタンを押すとバッファーマemoryに保存されていたコピー元の設定がペーストされます。

[LIBRARY]ボタンを押すとGEQ LIBRARYポップアップウィンドウが呼び出され、GEQ設定をストア/リコールすることができます。

GEQ設定をバッファーマemoryにコピーすると、GEQ設定を変更した後に[COMPARE]ボタンを押すことでバッファーマemoryに保存されている設定と現在の設定内容を入れ替えて比較することができます。



スクリーン下部のマルチファンクションエンコーダーを使用してライブラリリストをスクロールできます。任意の番号を選択したら、[RECALL]または[STORE]ボタンを押します。



Tip; 31BandGEQに設定をペーストする場合はコピー元の設定に制限はありませんが、Flex15GEQに設定をペーストする場合は、使用しているバンド数が15バンド以下のGEQ設定のみペーストできます。

Note; Flex15GEQはライブラリーに保存する時は2台1組として扱われ、コピーおよびペーストは2台まとめて行われます。



モニターセクション - CUEボタン / モニターアウトプットの割り当て

各チャンネルにある[CUE]キーをオンにすると、オーディオ信号がCUEバスへ送られ、ファンクションアクセスエリアで信号レベルがメーター表示されます。また、オーディオ信号はフロントパネル下のヘッドフォンアウトに送られます。モニター設定を操作するには、ファンクションアクセスエリアでヘッドフォンのイメージが表示されている[MONITOR]ボタンを押します。



Note; 初期設定では[CUE]キーと[SEL]キーはリンクするようになっています。リンクを外すには、SETUP画面>USER SETUP>PREFERENCEで設定を変更します。



初期設定ではモニターセクションにはSTEREO L/Rの信号が出力されるようになっており、これらの信号はフロントパネル下のヘッドフォンアウトへ送られます。[CUE]キーで信号をキューするとキュー信号が優先されて出力されます。



PHONES LEVEL LINKボタンをオンにすると、PHONES OUT端子へ送る信号のレベルをパネル上のMONITOR LEVELノブで調節できるようになります。このリンクは外すこともできるので、モニターミキシングのオペレーションに便利です。

Tip; CUEメーター部分を押しすと、すべてのキューが解除されます。

MONITORポップアップウィンドウのSOURCE SELECTボタンを使用して、初期設定のモニターバスへのSTEREO L/R出力をオフにしたり、別の出力ソースまたはST INを選択することができます。



ヘッドフォンに加えて、モニター信号はリアパネルにあるOMNIアウト端子から出力することができます。このパッチはMONITORポップアップウィンドウからもアクセスできます。

Tip; これを使用して、モニターエンジニア用モニターまたはインイヤーモニターへの出力を設定します。

Note; LCRを使用していない場合は、モニターエンジニア用モニターにCバスを選択しないでください。

モニターセクション - モニターフェーダー機能

モニターレベルはトップパネル上のノブで調整しますが、MONITORポップアップウィンドウ画面上にもうひとつの「ソフト」コントロールノブが用意されています。これはマルチファンクションエンコーダーを使って操作しますが、STEREO / MONOフェーダーを使って操作することもできます。このやり方によって素早くモニターレベルの調整ができるため、マスターバスを使わないモニターエンジニアのオペレーションに適しています。

Note; MONITOR LEVELノブはモニターフェーダーと直列に配置されています。この機能でモニターレベルを変更しているときでも、トップパネル上のMONITORレベルノブは有効です。モニターフェーダー機能を使用しているときは、ノミナル出力のためにMONITORレベルノブは10に設定してください。



MODEボタンを押してフェーダー機能なし、STEREOフェーダー、およびMONOフェーダーを切り替えます。2つのフェーダーで2系統のアウトプットレベルを個々に調整することはできません。

モニタースピーカー1台でステレオやパンを設定した音源をモニターする場合は、MONO MONITORボタンを使用します。

Tip; STEREOおよびMONOバスを使用したFOHミックスとモニターミックスを同じコンソールから行う場合でも、ユーザー定義キーを利用してマスターとモニターを切り替えることでモニターフェーダー機能を使用することができます。



アウトポートポートディレイ

3つのスロット、AESポートおよびESポート (M7CL-48ES) を含むM7CLの各アウトプットはOUTPUT PORTポップアップウィンドウでディレイ、フェーズおよびアッテネーターの調整が可能です。このポップアップウィンドウは[SETUP]画面の[OUTPORT SETUP]ボタンを押して呼び出します。

Tip; 1つのチャンネル出力を複数のアウトポートポートに割り当てて異なるレベルやディレイ設定を行うことで、複雑な出力分岐に対応でき、使用するマトリックスチャンネルの数を減らすことができます。



Tip; この画面はすべてのアウトポートパッチを確認するのに便利です。

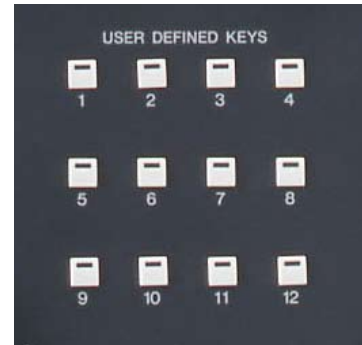
Tip; M7CLにはインプットディレイはありませんが、入出力を持つMYカードをチャンネルにインサートすることで、インプットディレイを実現できます。このインサートには、アウトポートポートディレイが含まれるため、たとえばMY16-AEを使用した場合にはコンソールのインサートポイントでスロットにパッチしてスロット出力をスロット入力にケーブルでスルー接続すれば、インプット用に16のデジタルディレイが利用できるようになります。

Tip; エンコーダーを押しながら回すと、アウトポートディレイをより細かい数値幅で調整できます。

ユーザー定義キー - ユーザー定義キーへの機能割り当て

M7CLには12個のユーザー定義キーがあります。これらには様々な機能を割り当てることができ、スクリーン上での操作を省略したりすることができます。ユーザー定義キーは初期設定でいくつかの機能があらかじめ割り当てられていますが、SETUP画面のメニューで自由に割り当てを変更することができます。

キー1 SENDS ON FADERモード(MIXセンド)
 キー2 SENDS ON FADERモード(MATRIXセンド)
 キー3~8 ページブックマーク
 キー9 ミュートグループマスター1
 キー10 ミュートグループマスター2
 キー11 HOMEキー (SELECTED CHANNEL VIEW画面 / OVERVIEW画面)
 キー12 トークバックON



USER SETUPポップアップウィンドウを呼び出すには、ファンクションアクセスエリアの[SETUP]ボタンを押し、次に[USER SETUP]ボタンを押します。この時にUSER DEFINED KEYSページが表示されない場合は、ポップアップウィンドウ下部のタブを使ってページを切り替えます。

割り当てる機能を変更するには、画面上のキーを押してUSER DEFINED KEY SETUPポップアップウィンドウを表示させます。



ページブックマークキーでは特定の画面に直接アクセスできます。この機能を使うには、ブックマークしたい画面を選択した状態でユーザー定義キーを2秒以上押します。これで、キーを押すたびにその画面をすぐに呼び出すことができます。

Tip; GEQやエフェクトの設定画面をブックマークしておくと、すばやくエディットできて便利です。



Note; 他によく使われるユーザー定義キーの機能としては、次のようなものがあります。

TAP TEMPO: ディレイエフェクトのディレイタイムをコントロールします。この機能を使用する時は、エフェクト設定画面でSYNCパラメーターをオンにしてください。

SET BY SEL: このキーを押すと、SELキーを使って選択された機能のオン/オフ切り替えができます(例: +48Vやインサートなど)。

SCENE: 前後の番号のシーンへの切り替えや、任意のシーンの直接リコール、RECALL UNDOの実行などができます。

M7CL EDITOR CONTROL: M7CLとM7CL Editorをオンラインで接続している時に、PCのEditor各画面をユーザー定義キーで呼び出すことができます。

MUTE MASTER: ミュートグループマスターのオン/オフを切り替えます。

Tip; 割り当てる機能のリストをスクロールするには、スクリーン下にあるマルチファンクションエンコーダーを使用します。

DCA / ミュートグループ - チャンネルをDCAマスター / ミュートグループに割り当てる

DCAとはアナログコンソールに見られるVCAの機能をデジタルミキサー上に再現したもので、VCAと全く同様にインプットチャンネルグループのレベルをコントロールできます。M7CLには8つのDCAマスターと8つのミュートグループがあります。チャンネルをDCAやミュートグループに割り当てるには、二つの方法があります。



SELECTED CHANNEL VIEW画面で割り当てを行う場合は、DCAまたはミュートグループボタンを押すだけです。

この方法は1チャンネルの割り当てには適していますが、すべてのドラムチャンネルをDCAグループに加えたり、すべてのチャンネルをミュートグループに割り当てておきたいような時は、DCA / MUTE GROUP ASSIGN MODEポップアップウィンドウを使用すると簡単です。このポップアップウィンドウは、SELECTED CHANNEL VIEW画面のリンクからまたはファンクションアクセスエリアのCHANNEL JOBボタンを押すことでアクセスできます。

スクリーンにDCA / MUTE GROUP ASSIGN MODEポップアップウィンドウが表示されているときは、SELキーの機能がグループアサインキーに変わります。スクリーン上のボタンでDCAグループを選択し、SELキーを使用してチャンネルを割り当てます。ミュートグループにチャンネルを割り当てる場合は、スクリーン上の左のボタンでモードをMUTE GROUP ASSIGNに切り替えて行います。

Note; DCAグループにはインプットチャンネルのみ含めることができますが、ミュートグループにはインプット / アウトプットチャンネルともにグループに含めることができます。



Tip; DCAナビゲーションキーを押してCentralogicフェーダーがDCAとして機能しているときは、SELキーを2度押すだけでDCA / MUTE GROUP ASSIGN MODEポップアップウィンドウにアクセスできます。

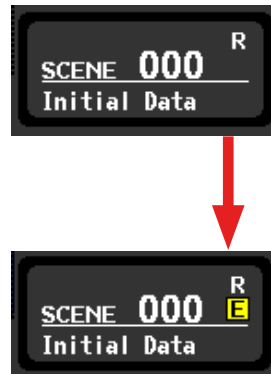


Note; ミュートグループ内のミュートされているチャンネルは、ONキーが点滅します。

Tip; ONキーを押してもミュートされているチャンネルをオンにすることはできません。チャンネルのミュートを解除するにはユーザー定義キーに割り当てたミュートマスターキーを押します。ミュートグループ内の特定のチャンネルだけを一時的にそのグループから外すには、DCA / MUTE GROUP ASSIGN MODEポップアップウィンドウでミュートセーフを使用します。

シーンメモリーを利用する - シーンのストアとリコール

M7CLでは300のシーンメモリーを本体にストアすることができます。1から300の読み書き可能なシーンに加え、ミックスパラメーターを初期値に戻すための読み込み専用シーン000が用意されています。また、あるシーンを選択している状態やエディットを加えた時点の現在のコンソール設定として「カレントシーン」があり、これらはM7CLの内部メモリー内に記憶されるため、コンソールの電源を切ってもカレントシーンの設定内容は保持されます。



シーン000は読み込み専用です。現在読み込まれているシーンのミックスパラメーターを変更すると、黄色のEマーク **E** (EDITマーク)が表示されます。

コンソールのパラメーターを変更して、その状態を保存しておきたい時は、SCENE MEMORY [▲]/[▼]キーを押して新しい保存先のシーン番号を選択します。選択されたシーン番号は点滅します。次に、[STORE]キーを押すとSCENE STOREポップアップウィンドウが表示されます。ここで、必要に応じてシーンにタイトルやコメントを付けます。



トップパネルのSCENE MEMORY [STORE]キー、またはSCENE STOREポップアップウィンドウ下部のSTOREボタンを押すと、シーンがストアされます。ストアが完了するとファンクションアクセスエリアのシーン番号の点滅が止まり、ミックスパラメーターに再び何らかの変更を加えるまでEマーク **E** の表示が消えます。

シーンをリコールするには、SCENE MEMORY [▲]/[▼]キーを使ってリコールしたいシーン番号を選択し、[RECALL]キーを押します。これで、コンソールは選択されたシーンの設定に変わります。シーンリストにデータが何も保存されていない空のシーンはリコールできません。初期設定の状態から作業を始めたい場合は、シーン000をリコールしてください。



ファンクションアクセスエリアのSCENEフィールドを押すと、SCENE LISTウィンドウが表示されます。SCENE LISTウィンドウではシーンのストアやリコールに加え、シーンのカット、コピー、インサート、クリアおよびペーストを行ってリストの編集ができます。

Note; コピー / カット元として複数のシーンを選ぶことはできません。

Tip; SCENE LISTウィンドウには、SCENE STORE / RECALL UNDOボタンがあります。シーンをリコールした後にやり直しをしたい場合は、UNDOボタンを押して取り消します (UNDOは直前の操作のみに有効です)。UNDO機能をあらかじめユーザー定義キーに割り当てておくと素早く操作できて便利です。

シーンメモリーを利用する - シーンに含まれる設定

シーンをストアすると、下記項目のシーンに含まれる設定がすべてシーンメモリーに保存されます。シーンに含まれない設定はグローバルメモリーに保存され（パネル上の物理ノブは除く）、シーンをリコールしても影響を受けません。これらはコンソールの電源を切っても記憶されており、電源を入れると以前の設定が再現されます。

シーンリコールに含まれる設定

- ヘッドアンプ（レベル、+48V、フェーズ）
- チャンネルネーム / アイコン
- パッチ（インプット、アウトプット、インサート、ダイレクトアウト、モニター、カスケード、ラック）
- インサート（オン / オフ、インサートポイント）
- ダイレクトアウト（オン / オフ、ダイレクトアウトポイント）
- EQ（HPFを含むすべてのパラメーター）
- ATT（デジタルアッテネーター）
- DYNAMICS1（すべてのパラメーター）
- DYNAMICS2（すべてのパラメーター）
- MIX/MATRIXセンド（バスセットアップ、オン / オフ、レベル、プリ / ポスト）
- パン / バランス（ポジション、STEREO / MONO / LCR）
- DCA（グループ割り当て、レベル、オン / オフ）
- ミュートグループ（グループ割り当て）
- フェーダー
- チャンネルリンク
- ラック（すべてのパラメーター）
- INPUT TO TALKBACKのヘッドアンプ
- シーンフォーカス
- クロスフェード設定（オン、タイム）

シーンリコールに含まれない設定

- ユーザー定義キー
- プリファレンス設定
- モニターレベルノブ
- ヘッドフォンレベルノブ
- フロントパネルトークバックレベルノブ
- ブライツネス設定
- OUTPORT設定（パッチを除く）
- MIDIセットアップ
- ワードクロック
- マスター+48V
- CUEポップアップ（PFLトリム（インプット / アウトプット）、DCAトリム）
- MONITORポップアップ（レベル、ソースオン / オフ、MONO、リンク）
- オシレーター（すべてのパラメーター）
- セーフ設定（ミュート、リコール）
- パスワード
- スクリーンページ / ポップアップウィンドウ
- SENDS ON FADERモードで選択しているMIX/MATRIXチャンネル
- メーターポイント設定
- 外部HAのスロットアサイン

シーンをリコールする時に、特定のパラメーターを指定してリコール操作から除外することができます。ファンクションアクセスエリアのCH JOBボタン>RECALL SAFEボタンを押すと、RECALL SAFE MODEポップアップウィンドウが表示されます。シーンメモリーの利用とリコールセーフの詳細については、クイックスタートガイドのパート3で解説します。



読み出し専用のシーン000、読み書き可能なシーン001～300、カレントシーン、合わせて302種類のシーンがあります。

シーンとセッションについて

読み書き可能なシーンは300ありますが、これらはコンソールのセッションメモリーの一部に過ぎません。セッションをUSBメモリーにセーブすると、300のシーンすべてが各種ライブラリーおよびユーザー定義キー設定とともにその中に保存されます。M7CL内のセッションファイルメモリーはひとつだけです。つまり、外部からセッションファイルをコンソールにロードした場合、既存の内部データはすべて上書きされ消去されます。セッションファイルをロードする前に必ずバックアップをとってください。任意のシーンを抽出して個別にロードすることも可能ですが、その場合はStudio ManagerソフトウェアM7CL Editorを使う必要があります。こちらについてはクイックスタートガイドのパート3で解説します。

トラブルシューティング

ファンタム電源が機能しない。

- ☞ +48Vファンタム電源はHAポップアップウィンドウでオン/オフできますが、SETUP画面にファンタムマスターのスイッチもあるので注意してください。ファンタムマスターの設定はシーンリコールの影響を受けません。

MIXセンドをエンコーダーで調整する時のステップが大きい。

アウトプットディレイ設定で細かい調整をしたい。

- ☞ エンコーダーを押しながら回すと、より細かいステップでの調整が可能です。

Navigationキーを押した時、タッチスクリーンの画面は変わるがCentralogicセクションの設定が切り替わらない。

- ☞ 他のフェーダーバンクを選択している場合でもDCAマスターを常にCentralogicセクションにアサインしておきたい時に使われる機能が有効になっている可能性があります。Navigationキーのインジケータが点滅するまで押し続けると、タッチスクリーン画面を切り替えても現在アサインされているフェーダーバンクはCentralogicセクションにロックされたままになります。解除するにはもう一度Navigationキーを長押しします。

シーン000をリコールしても、一部のフェーダーやパラメーター設定が初期値にリセットされない。

- ☞ 一部のパラメーターでリコールセーフが設定されている可能性があります。リコールセーフが設定されていると、シーン000が完全にリコールされません。CH JOB>RECALL SAFE設定画面でリコールセーフの設定をすべてクリアし、もう一度シーン000をリコールしてください。シーンリコールの影響を受けない設定については、クイックスタートガイドPart1の5ページを参照してください。

フェーダーが意図したとおりに機能しない。

- ☞ コンソールがSENDS ON FADERモードになっていませんか？ SENDS ON FADERモードが有効になっている場合、チャンネルフェーダーはチャンネルマスターではなくMIX/MATRIXセンドレベルの設定になります。SENDS ON FADERモードでは、選択しているチャンネル以外のすべての[SEL]キーのインジケータが点灯します。通常のモードでは選択しているチャンネルの[SEL]キーインジケータのみ点灯し、その他のチャンネルの[SEL]キーインジケータはオフになります。
- ☞ また、チャンネルの移動やパッチの変更がされている可能性もあります。パッチとチャンネルネーム/ナンバーを確認して、意図したとおりの設定かどうか確認してください。

アウトプットディレイの設定をしたい。

- ☞ アウトプットポートディレイの設定は、SETUP画面のOUTPUT PORTポップアップウィンドウで行います。

タップテンポキーがうまく機能しない。

- ☞ SYNCパラメーターをオンにするのを忘れていませんか？ SYNCパラメーターがオフになっていると、タップテンポが機能しません。キーのタッピング間隔にも注意してください。タップテンポは最後の4回のタッピング間隔の平均値がBPMパラメーターに反映されます。また、より短いディレイタイムが必要な場合は、設定画面上のNOTEパラメーターノブを左に回して、実際のタッピング間隔よりも短い値を得る必要があるかもしれません。

M7CLやM7CL Editorについてのより詳細な情報がほしい。

- ☞ M7CLおよびM7CL Editorのマニュアルは下記のヤマハプロオーディオサイトからダウンロードできます。
<http://www.yamaha.co.jp/manual/japan/result.php?WORD=M7CL&div=pa>